



デジタル図書館

附属図書館長 万波通彦

京都大学には60余の図書館（室）がありますが、これは大学の長い歴史を反映している為でしょうか、他大学とは比較にならないほど沢山の数です。その中で、専門文献・専門雑誌と共に一般図書も取り揃え、学部学生が利用しやすいよう整備運営しているのは、附属図書館と総合人間学部図書館です。特に、附属図書館では週日は夜9時まで、土曜、日曜日も開館しています。平成8年の附属図書館の入館者数は、一日平均2,504人となりました。来館者の大多数が学生として計算すれば（乱暴な計算とお叱りを受けそうですが）、全学の学部・大学院の学生約2万人のうち、約13%が毎日図書館に来ていることになります。沢山の学生諸君が図書館を出入りする様子、夜遅く迄机に向かっている姿、カウンターで職員に相談する様子を見るにつけ、附属図書館の大学教育における重要な役割を改めて認識しました。しかし、それにしても附属図書館の学生用図書購入費が少ないことに驚いています。

その他の図書館（室）は設置部局の専門資料を収集しています。これら図書館（室）は学内の情報ネットワークで有機的に結ばれた京都大学図書館システムを構成し、オンラインで蔵書目録検索(OPAC)が利用できるよう

整備されています。未だ数は充分ではありませんが、いくつかのデータベースも利用できます。更に大学共同利用機関である学術情報セ



ンターを介して全国の大学図書館と結ばれ、全国的な規模の「学術情報システム」の一翼を担っています。これとは別に、インターネットでは多くの資料が利用できるようになりました。たとえば、「Project Gutenberg」では、聖書を始めシェイクスピア等の書籍約900冊を電子化し無料公開していますが、2001年までに1万冊を公開する計画だそうです。

このような図書館電子化の動きの中で、京都大学では「電子図書館システム」を設置することとなり、来年1月にはそのための機器

が稼働する予定です。大学の附属図書館の役割として、電子図書館またはデジタル図書館はいかなる機能を持つべきかについては手探りの部分が多くあります。特に最近の電子通信技術の進歩は急速で、電子化される情報の形態、送受信技術等の数年先を予想することも容易ではありません。また、著作権とも関係しますが、今後商業ベースの書物がどのような形で電子出版されるかも予想できません。しかし、教職員・学生が図書館に出向くことなく、教室、研究室、自宅から、できるだけ多くの研究・教育用資料を利用できるようにすることは重要なことです。京都大学内では、K U I N S システムで大量のデータを送受信できますし、総合情報メディアセンターの教育用端末機器の整備も始まり、情報環境は整いつつあります。

とにかく、附属図書館と京都大学図書館システムは新しい時代を迎えることになりました。外部から購入し学内で利用できるデジタル情報としては、すでに多くのC D - R O M があります。さらに、今まで紙の形で出版されていた雑誌をインターネットで直接読むことができる電子ジャーナルや紙媒体を使わずインターネットでのみ利用する電子ジャーナルも出版されています。本学では、数種類のC D - R O M を媒体とした電子情報が学内L A N で利用できますし、また、費用は利用者の個人負担ですが大型計算機センターでも数十種類のデータベースを利用できます。いくつかの学内図書室では電子ジャーナルを導入し利用者の便宜を図っていますが、国内の他大学や外国の大学に比べて、京都大学での電子情報の利用、電子ジャーナルの整備は遅れています。図書費の急騰の中で電子ジャーナルを購入するための経費負担は問題ですが、今後はこの種の電子情報を利用しやすくすることが電子図書館の重要な役割です。

インターネットで電子情報を探すためのコンピュータは使い勝手がよくないので、研究分野によってはコンピュータの利用が少ないようですが、電話やファックスのように使いやすくなるのは時間の問題です。電子情報は万能ではありませんが、非常に有力な教育・

研究の手段になるに違いありません。より多くの研究分野で電子情報を利用していただけように、情報機器の整備、利用者支援をすることも附属図書館の任務です。

電子図書館のもう一つの役割として挙げられているのは、学内外に向けての学術情報の発信です。すでに、附属図書館では国宝「今昔物語集」を始め20冊以上の貴重書を映像データとしてホームページに公開しています。更に学内の貴重資料を電子化して公開してゆく予定です。それに加えて、学内で作られる情報を電子化して発信する「京都大学エンサイクロペディア」を計画しています。このためには学術情報の発信源である各部局の協力をお願いしなければなりません。

既に、デジタル技術を駆使したC D - R O M は、文字に加えて映像や音を取り入れています。やがて、C D - R O M やそれに相当するデジタル出版物は、インターネットを仲介としてより高度の情報源となるでしょう。その時には音楽レコードが音楽C D に役割を譲ったように、紙に書かれた書物はデジタル化された電子出版に置き換わってしまうかも知れません。私事ですが、学生時代から歩いた鴨川一帯を詠じた折口信夫の詩「もの忘れ」を改めて読みたくなりました。探していた詩は見つかりましたが、その次に載せてあった詩に心引かれました。私の感傷でしょうか、でも、「書」の挽歌にならないことを願って紹介します。

断 章

思いおこす さまざまの書^{フミ}
あはれ ほろびにし さまざまの書
思へども 思い見がたく
さはなりし書のなかにー
たゞ 二つ 三つ 思ほゆる書のこひしきー。

幸薄く 繊弱^{アエカ}なりし人の如
人をして 悲しみに堪えざらしむー。
たゞ閑^{シズ}かにして ほのかなる 紙のにほひ。
(折口信夫「近代悲傷集」より)

(まんなみ みちひこ)